



石原ケンジは2012年4月に那須光則との二人展をステップスギャラリーで行った。その際には16点の墨絵が壁面を飾ったが、今回の初個展では、テッセラクトをモチーフとしたアクリル画を大8、小11合わせて19点出品した。

石原によるとテッセラクトとは「四次元立方体」であり、四次元を平面に描くことに「少なからず多面的な作品に憧れを感じる」(パンフレット)ことを強調し、「いつも書いている円の線で、テッセラクトに挑戦」(同)した。

黒地に、折り重なる白い線によって女性像が浮び上がる。円は恣意的でありながらも確実に女性が持つ体のラインを捉えている。それどころか、人間の関節が球体であることから発する、人間が円の存在であることを浮彫にする・

画面に表れる濃淡は、石原が墨絵を志している点にも由来するのであろう。そのように考えて再度画面に向かってみると、単に黒い画面に白い線が乗っているのではなく、幾重にも重なる線は面を構成するのではなく色となるのだ。

すると画面に地場が生まれ、全体に動きが発生する。それは磁石が反発してはくつきあう動きに誘われて離散を繰り返す、砂鉄のように見えないものが見えてくる。これこそ、テッセラクトの世界であると言う事が出来るのではないだろうか。

この点で石原の作品は、スーパーリアリズムと一線を画すことになるのだ。

そして此処には、描かれている人物の、描かれていない表情が浮び上がってくる。それを生きるエロティシズムと呼ぶことに、何の抵抗も生れる事はないであろう。

